

現代沖縄における土帝君の整理(1)

大城 沙織

Sorting the “Tu-Ti-Kun” in Contemporary Okinawa (1)

Saori OSHIRO

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第17号別刷

2024年3月15日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17

March, 2024

現代沖縄における土帝君の整理(1)

大城 沙織¹⁾

Sorting the "Tu-Ti-Kun" in Contemporary Okinawa (1)

Saori OSHIRO¹⁾

1-1. はじめに

土帝君とは中国に由来をもつ土地神、農耕神、子授け等の神であり、沖縄島とその周辺離島で60件余り信仰されている。文献上の記録として最も古いのは『球陽』の巻九の尚貞王30年にあり、1698年(康熙37)に大嶺親方の鄭弘良が中国から土地公の神像を持ち帰って、旧小禄村大嶺に祀ったのが信仰のはじまりとされる(球陽研究会編1974)。最も有名なのは本部町瀬底の土帝君である。自然林を背にして、拝殿、本殿が直線状に段差をつけて配置されている拝所は、最大規模の土帝君拝所であり、国指定の重要文化財としても登録されている(写真1)。



写真1 本部町瀬底の土帝君

土帝君のルーツとされる土地公は正式名称を「福德正神」といい、台湾では客家から「伯公」と呼ばれるほか、華北地域では「土地爺」ともよばれる。神位はそう高くないものの、親しみやすい神として知名度は高い。そのため従来、土地神であるとされた土地公だが、現在はさまざまな性格を帯びている。王健旺は土地公の性格について、以下のように挙げ

ている。村落の守護神、家の守護神、農業の神、商業の財神、墳墓の守護神、水源の守護神、山の神、鉱業の守護神、建築業の守護神、戸籍を司る神、死後の世界に導く神、そのほか生育や病気の治癒、縁結びなども祈られるため「社会雑務の神」としている(王2003 pp. 32-39)。

土地公は毎月旧暦2日と16日に做牙として拝まれるほか、旧暦2月2日は土地公の生誕日として「頭牙」、旧暦12月16日を一年最後の土地公祭祀として「尾牙」と呼び、それぞれ盛大に祭祀が行われる。



写真2 台南市鎮轄境頂土地公廟での頭牙

(2023年2月21日,旧暦2月2日)

筆者は中国・台湾の土地公をどのように琉球沖縄社会が受容し信仰し続けてきたのかに関心を持った。しかし土地公と土帝君の比較は容易ではない。沖縄の民俗は集落ごとに大きく異なることはこれまでの民俗研究のなかでもよく言われてきたことであるが、土帝君信仰においても同様のことが指摘できるからである。呼称、神体の形態、祭祀組織、祭日、祭祀組織等々、各地域で異なっているほか、信仰の

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

核をなすであろう神の性格ですら土地神、農耕神、全能の神と違いが見られる。なお、土帝君のルーツとされる中国の土地公もまた地域ごとに大きな違いをみせるため、こうした多様さや信仰の柔軟性こそが土帝君の性質を表しているとも考えられるが、本論文は地域ごとに異なる土帝君信仰の整理を行い、土帝君から地域の歴史や社会変化についてアプローチするための基礎資料としたい。

なお、本論文で取り上げる土帝君は沖縄島とその周辺離島に限定する。窪によると八重山地方にも「トティークン」などと呼ばれる土地神が存在する(窪1971)。しかし、八重山地方の土地神には祠も神像も存在せず、沖縄島をはじめとする地域にみられる土帝君信仰とは大きく異なるため、本論文では八重山地方の土帝君を取り上げず、今後の課題とする。

1-2 先行研究と方法

中国にルーツをもつ土帝君は沖縄における外来信仰の一つとして位置づけられるが、1970年代まで沖縄における外来宗教・外来信仰の研究はあまり行われてこなかった。沖縄の民俗研究において中心的に関心が寄せられたのは、琉球王府の祭政一致とノロをはじめとする村落構造、親族集団である「門中」と祖先祭祀、来訪神などであった。これに対して沖縄の日本復帰を機に、九学会連合において沖縄が調査地に選定されたことで外来宗教にも目が向けられるようになる。土帝君も「道教的信仰」として取り上げられた(窪1976)。

九学会連合による沖縄調査の後も窪徳忠は断続的に沖縄調査を行い、土帝君をはじめとする中国的信仰についての報告や論文をまとめている。『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』において沖縄県内に50近い土帝君信仰を報告している(窪1990 pp. 132-133)。そのほか『中国文化と南島』(窪1981)にも詳しい。窪の研究の功績は沖縄各地の土帝君の名称、神体の形態、祭祀について概観したうえでまとめ、さらに琉球国時代の史料を用いて土帝君のルーツが中国の土地公にあることを明らかにしたことにある。

本論文でも窪の先行研究を踏まえたうえで、本論文では市町村史や字誌での記述を積極的に活用した。沖縄は地域史の編纂が比較的盛んな地域であ

り、これまで数多くの市町村史や字誌で土帝君は記録されてきた。郷土史は地域ごとに設定された編集方針によって編まれるため、地域によって項目や記述量に差があるものの、沖縄の各地で地域住民の視点で書かれた郷土史の記述こそ、土帝君が地域住民にとってどのような存在であるかが反映されているとも考える。

土帝君だけに限らず信仰を研究するうえでは、村落の構造や祭祀実践の積み重ね、村落が内包する歴史、琉球王府との政治関係を踏まえた研究を記述すべきであろう。多くの土帝君は村落単位で祀られ、村落を取り巻く社会関係、内部の人間関係が土帝君においても多大な影響を及ぼしている。そのため、土帝君のみを点で描く研究手法ではなく、村の全体性を意識しながらアプローチするべきであると考えられる。しかし、前述の通り土帝君は多様であるため、どの地域の土帝君を取り上げれば「土帝君信仰」を描けるのかが課題となる。本研究は土帝君信仰の普遍性や特殊性を把握し、議論を進めるための第一歩として位置づけたい。

土帝君は現在筆者が把握しているだけでも、63件に上る。この63件は市町村史や窪らによる先行研究、さらに筆者によるフィールドワークで把握している数であり、家庭や個人単位で祀られる土帝君においてはあまり把握されてこなかった実態がある。本稿で取り上げる土帝君もそのほとんどが村落祭祀で祀られる土帝君であることに留意したい。また、祭祀が廃れた土帝君や米軍基地として拝所が接収された土帝君も存在しているため、土帝君の総数はさらに多いと推測する。

この63件の土帝君に対して、先行研究や市町村史から一定の調査項目のもと資料情報を収集した。紙面の都合から本稿では分布、性格、名称、神体の形態について整理し、報告したい。なお沖縄における土帝君の分布や祭祀組織、祭日については先にその概略を別稿(大城2023)にて報告しているが、本稿では新たに沖縄全域に視野を広げ、現在把握している土帝君63件の整理を行った。

2-1 分布

分布は沖縄島に56件、久米島2件、伊是名島2件、伊平屋島2件、瀬底島1件、宮城島1件となっ

地図 1 土帝君分布地図



た(地図1)。なお、土帝君の一覧表については巻末にまとめた(表1)。沖縄島内の分布を市町村別にみると、最北端の国頭村から最南端の糸満市まで土帝君が分布しており、沖縄島の広い範囲で分布していることが分かる。一方で、土帝君が満遍なく分布しているわけではなく、信仰には密集地域と空白地域が存在している。地理的には沖縄島中南部の西海岸で土帝君が多く祀られているものの、当該地域は住民が多く、集落数も多いことに留意が必要である。琉球国時代の行政区分である間切別で整理をすると密集地帯は顕著であり、最も多いのは北谷間切であった(グラフ1)。北谷間切は現在の嘉手納町と北谷町を含む地域であるが、寄留土族による集落も比較的多い地域である(田里 1983)。屋取集落は首里・那覇から農村地域に土族が移住することによって形成される集落であり、土族の人口移動は18世紀初頭からみられる。田里によれば、沖縄本島の約600の村落のうち138が屋取起源の村とされる(田里 1968)。土帝君は中国由来の神であり、琉球国時代に道教をはじめとした中国文化の知識をもつ者は土

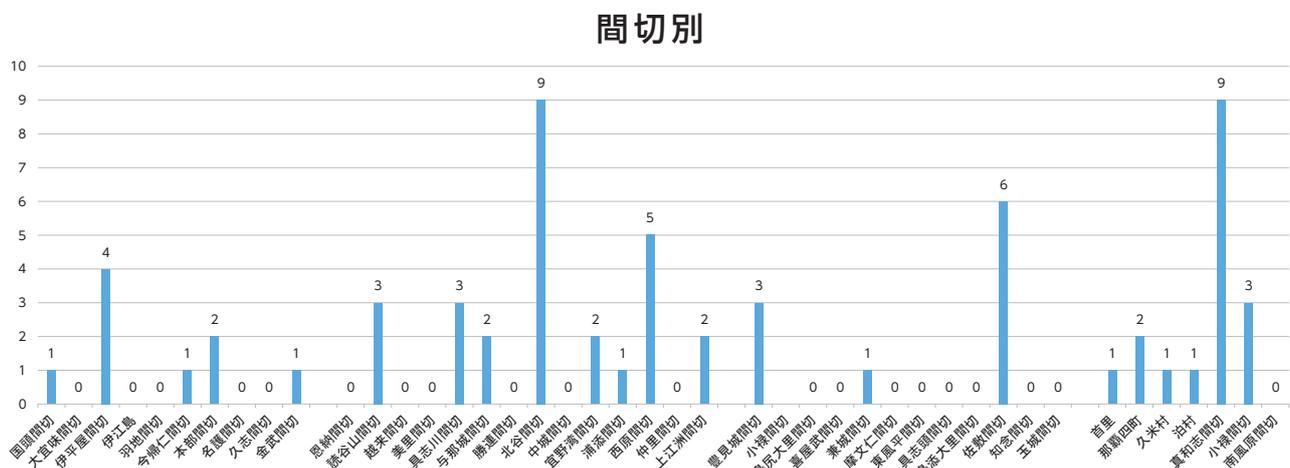
族層を中心に限定された。そのため、土族の移動が農村地帯へ土帝君を拡げた一つの契機になったともいえる。しかし全ての土帝君を屋取集落や土族と絡めて考えることは難しい。屋取とは異なるルートから祀られたと考えられる土帝君もまた数多く存在するためである。

北谷間切に次いで土帝君分布が多いのは、佐敷間切である。佐敷間切では古村の全てで祀られており、屋取集落では土帝君が祀られていない点で北谷間切とは対極をなす。佐敷間切は三山統一を成し遂げた尚巴志生まれの地であり、王妃直轄地とされた。

土帝君信仰の空白地帯は沖縄島中北部の東海岸に多い。例えば、東海岸に限定するとうるま市以北の土帝君は宜野座村松田の1件のみであり、金武町や名護市久志辺野古地域、東村には1件もない。一方で霊石の一種であるビジュルを祀る地域が沖縄島中北部の東海岸に集中していることもまた指摘できる(平敷 1978)。ビジュルと土帝君の関係について本論文では詳しく触れないが、ビジュルと土帝君の祭日が一致する例があること、両者が混合して祭祀されている例があること等から互いに補完関係にある可能性がある。

さらに注目したいのが離島の土帝君の存在である。沖縄島周辺離島のうち、久米島2件、伊是名島2件、伊平屋島2件、瀬底島1件、宮城島1件の土帝君が分布しており、そのうち瀬底島と宮城島が沖縄島と橋でつながっている。特筆すべきはうるま市宮城島桃原の土帝君である。聞き取り調査から、うるま市宮城島桃原では10年ほど前から旧暦2月2

グラフ 1 土帝君所在村落(間切別)



日に「土帝君」と呼ばれる祭祀を行っていることが分かった。その祭祀のきっかけとなったのはうるま市屋慶名の土帝君であるという。桃原集落では屋慶名土帝君に拝みに行っていたが、10年ほど前から屋慶名の土帝君ではなく、「桃原のお宮」や「桃原守護神」と呼ばれる神に対して土帝君拝みを行うようになった。宮城島桃原では土帝君と呼ばれる神体や拝所が存在せず、土帝君は行事の名前として認識されていた。宮城島桃原の例は信仰の広がりを知る意味で示唆的である。

なお、離島において外来神が祀られる例として久米島の真謝天后宮が有名である。真謝天后宮の由来は以下の通りである。1756年に琉球王の即位を承認する使節の冊封使が乗った船が暴風雨に遭ったが、久米島島民の救援によって一命をとりとめた。これは媽祖の加護のおかげであると感謝し、正使である全魁が尚穆王を通じて天后廟を建立した。また、南城市奥武島の観音堂にも同様の由来譚が残っている（南城市教育委員会編 2018）。沖縄の在来信仰である御嶽や殿と異なり、土帝君は外来神であるため外部との接触が分布にも影響する。屋取集落の土帝君や民間宗教者による招来はその一例である。しかし土帝君の招来伝承において、久米島の真謝天后宮や奥武観音堂のような由来を確認することはできなかった。

2-2 性格

土帝君は基本的に土地神、農耕神という性格のほかに、イモの神様、土の神、災害除けの神、金儲けの神、大漁の神、雨乞いの神、航海安全の神、健康の神、子どもの成長に関わる神という性格があるとされる（塩月 2008）。



写真 3 農耕神とされる那覇市国場の土帝君祭祀
(2022年3月4日, 旧暦2月2日)

地域において土帝君がどのような神として信仰されているか、という問いは土帝君信仰を考えるうえで核をなすと考えるものの、人々の心の内によって異なる土帝君への情念や祈りを捉えることは非常に困難で、個々の信仰実践に注目することしかできない。そのため土帝君の性格についてはあえて表にまとめることはせず、本項では土帝君の性格として特徴的な点のみを挙げたい。土帝君は基本的に土地神、農耕神として語られるが(写真3)、地域によってはさらに農作物を限定し、イモの神とすることもある。また、これに関連して土帝君は野国総管であるというように語る地域もある。野国総管とは1604年に進貢船で中国に渡り、一年後の帰国時に芋の種苗をもたらした人物である。この功績によって沖縄の食糧事情は改善され、現在でも沖縄の偉人として挙げられている。土帝君もイモと共に中国からもたらされたものとして、両者が結びつけられた可能性もある。

土帝君を土の神とする例もある。那覇市長田や那覇市首里山川にみられる特徴である。(那覇市企画部市史編集室編 1979)

那覇市首里山川の土帝君は別名首里カラヤーの土帝君であり、王府の瓦職人によって祀られてきた(写真4)。那覇カラヤーの土帝君も同様であり、特定の職業の人物から地域住民へと信仰範囲が広がっている。カラヤーの土帝君では火伏せの機能も付与されていることが特徴的である。

2-3 名称

『球陽』においては「土地君」と記されていた土帝君であるが、現在、文字で表記される場合は基本的に「土帝君」で統一されている。しかし呼称はトーチーク、トゥーティンク、ティーティンク、トゥーティークン等地域によって異なる。窪も指摘する通り、トーチークやトゥーティークといった呼称はすべて「土地公」の中国語読みの影響を色濃く受けた呼び方である。ここでは地域ごとの土帝君名称の細かな差異については取り上げず、土帝君の別名について取り上げる(表2)。

まず「フトウキ」つまり仏として呼ぶ地域である。これは伊是名村勢理客、伊是名村諸見に見られ、同様の例として土帝君拝所を「フトウキンメー」とし

て呼ぶのがうるま市宮里、糸満市武富、南城市新里である。次に土帝君拝所を「宮」とする地域である。南城市津波古では「お宮」と呼び、那覇市壺屋では「ニシのお宮」、嘉手納町千原では土帝宮、嘉手納町水釜でもミヤとする。土帝君を「フトウキンメー」と呼ぶ南城市新里と「お宮」と呼ぶ南城市津波古はそれぞれ大正期に寺社を合祀した経緯があり、これを契機にそう呼ばれるようになったという。

そのほか、土帝君をイモウフスーと呼ぶ南城市宇佐敷の例がある。イモウフスーとは中国から芋を持ち帰った野国総管であり、佐敷では土帝君を野国総管として認識している。またクラヌカミと呼ぶ北谷町山川家、ウタキ小と呼ぶ嘉手納町久得、祠をティラと呼ぶ那覇市大嶺、那覇市国場の例が挙げられる。

2-4 神体の形態

土帝君の神体は神像、石、絵像があり、さらに神体そのものが存在しない場合がある。¹ 神体の形態として最多であるのは神像であっただろうと推測される。これは現時点で神体を神像としている例が複数あり、さらに「かつては神像が安置されていた」という証言に基づく推察である。土帝君の神像は全て人像で、髭の長い翁の様子をしている場合が多い(写真4)。また服装も琉装または漢服



写真 4 那覇市首里山川町の土帝君

であり、位が高い人物であるように感じられる(写真6)。

土帝君のルーツである台湾の土地公に目を向けると、そのほとんどが人形の神像である。多くの場合は髭の長い老翁の椅座像である。土地公は人々にとって身近な存在であるため、優しい顔つきをしているほか、老翁は漢服を着用し、漢服には「寿紋」とよばれる模様が刺繍されていることも多く、貴族の象徴である玉帯を締める。手には金運の象徴である金錠や勺を持ち、頭も五星冠帽をかぶる(謝2014)(写真5)。



写真 5 台湾台北市竹仔林土地公廟

1980年代になって台湾に神像製作を依頼した宜野湾市宜野湾の土帝君は、台湾の土地公と類似した造形をしている。そのほか、神像の土帝君は国頭村奥間、今帰仁村越地、本部町瀬底、本部町浜元、うるま市屋慶名、西原町棚原、宜野湾市宜野湾、那覇カラヤー、那覇市国場、那覇市寄宮、南城市小谷、南城市津波古、南城市屋比久、伊是名諸見、伊是名村勢理客が挙げられる。台湾の土地公と同様、手には杖もしくは如意状のものを持っている例が数例ある。

¹ 窪は神体の形態を神像・石・絵像・石塔・板書の5つに分類している(窪1990)。しかしながら、石と石塔の差異が小さ

いこと、板書を信仰対象としている例が確認できなかったことから、本論では神像・石・絵像に大別する。



写真 6 国頭村奥間の土帝君

神体の材質として先行研究で挙げられているものは、陶製、木製、石製がある。どこで製作されたものであるか判明していないことも多いものの、伊是名村勢理客の神像は壺屋焼であり（伊是名村史編集委員会編 1989）、南城市津波古でも戦後土帝君の再建にあたって壺屋で神像を購入した話を聞き取れたため、壺屋焼の神像はほかにもあると考えられる。そのほか、読谷村親志では読谷村内の「やちむんの里」にて入手したとの例もある（読谷村史編集委員会編 1995）。

ただし土帝君の神像は沖縄戦にて破壊されるか、盗難に遭ったとされる例が多く、現在の土帝君の姿は戦後作り変えたものが多い。現在は陶製の土帝君が目立つものの、沖縄戦以前には木製であったとする記述も存在する。今帰仁村越地、伊是名村諸見の土帝君は現在、石製であるものの、戦前は木製だったという（今帰仁村史編纂委員会 1975）（窪 1971）。南城市佐敷、南城市手登根の2地域の土帝君は現在神体が存在しないが、以前は木製の神像が存在していた（佐敷町史編集委員会編 1984）。

さらに本部町瀬底の土帝君神体も以前は「中国由来の木像」であった（瀬底誌編集委員会 1975）。沖縄戦以前の信仰の姿を伝えるものは少なく、わずかな情報から沖縄戦以前の信仰の姿や「中国から持ち帰ってきた」神像の形態を推測するしかないのが現状である。なお、中国から持ち帰られたとされる神像の全てが木製であったわけではなく、浦添市牧港は陶製の神像を祀っていた。しかし現在、浦添市牧

港では神体が失われ、信仰もされていない（浦添市史編集委員会編 1983）。

また神像は1体とすることが最も多いが、西原町棚原や那覇市寄宮、宜野湾市宜野湾のように男女二対とする例もある。さらに南城市津波古の土帝君は本尊と二協侍の3体となっている（写真7）。



写真 7 南城市佐敷津波古の土帝君

中国や台湾の土地公には「土地公の妻」といわれる土地婆・土地媽という存在が信じられている。しかし台湾において土地婆は意地悪で欲張りだとされており、土地公のように広範に信仰されているとはいえない。沖縄において土地婆の伝承を聞くことはほとんどできない。南城市津波古の土帝君は本尊のほかに女神を伴っているものの、地域において「土帝君の妻」という認識はなされていない。例外は宜野湾市宜野湾の土帝君であり、土地婆と伴って祀られている。その形態も中国の土地婆像と類似しているほか、土帝君夫人として認識されている。ただ、これも宜野湾市宜野湾の土帝君が1980年代に台湾の中央民俗学研究所教授の教授の下、製作したものであることが影響を与えていると推測できる。

なお、台湾では虎爺と呼ばれる属神とともに祀られることも多い（王 2003）（写真8）。これは土地の守り神である土地公が虎を退治したとする伝承があるためである。台湾において虎は厄除け・悪魔祓いの強い象徴でもある。しかし沖縄において虎爺を祀る例は見たことがない。



写真 8 土地公の下に祀られている虎爺
(台湾台北市竹仔林土地公廟)

土帝君の神体を石とする地域もあり、沖縄においては神像と石とが拮抗している。神体を石とする場合、自然石を神体としている地域(写真9)と石になんらかの加工を施している地域とに大別できる。



写真 9 糸満市武富の土帝君

窪徳忠は著書『沖縄の社会と習俗』で『使琉球記』に「有石無神像」とあること、台湾でも以前は石を土地神としていたことを例に挙げ、沖縄地方の土帝君の神体も古くは石であったかもしれない、と記している(窪 1970 pp59-60)。窪が述べる通り、台湾でも自然石を神体とする例があり、これらは原初的な形態を今に伝える土地公として評価されている(王 2003)。

実際、南城市屋比久では土帝君の神体が古くは石であり、中国からの像を得たことをきっかけに石と神像を替えたとしている(立命館大学説話文学研究会 1989)。一方で以前は神体が神像だったものの神像が失われた後に石を神体として祀っている地域もある。さらに神体が石と神像とで変遷をたどっている地域として、読谷村親志が挙げられる。読谷村親志の土帝君として、戦前は親志の土地からとれた「クチャ」と呼ばれる泥灰岩を祀っていたが、戦後神像に作り替え、現在は自然石を祀っている(読谷村史編集委員会編 1995)。

自然石を土帝君として祀る場合、ビジュアル信仰との関連性も指摘できる。ビジュアル信仰とは沖縄の霊石信仰の一種で、その祈願の内容は子授け、子育て、豊作、豊漁、雨乞い、航海安全など多様である(平敷 1978)。例えば嘉手納町久得では現在土帝君として祀られている神体を「ビジュアルのようなもの」として捉え、ビジュアルの「例祭」とされている9月9日にも土帝君祭祀を行うとする(久得史編纂委員会 2019)。

石に加工を施す場合、字を刻むことが多い。石に刻まれている文字として一番多いのが「土帝君」であり、宜野湾市大謝名をはじめ複数挙げられる(宜野湾市史編集委員会編 1985)(写真10)。

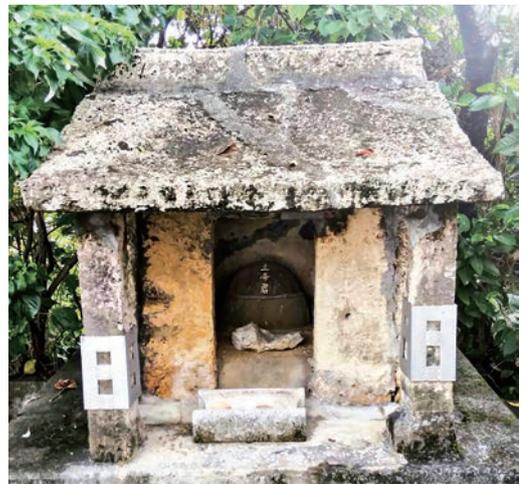


写真 10 宜野湾市大謝名の土帝君

嘉手納町水釜においては「感臆」と刻まれている。この文字には信仰して拝めば必ず願い事が叶うという意味があるとされる(嘉手納町史編纂委員会編 1990)。

絵像を土帝君の神体とする例は北谷町上勢頭²の屋号首里喜友名で祀られる土帝君のみである。現在の上勢頭の土帝君は頭の上に髪を結う「カタシカラ」という髪型をしており、琉装姿で描かれている(窪 1990)。また絵の右上には「唐」帝君と記されている。この北谷町上勢頭屋号首里喜友名家の土帝君は首里王府から土帝君絵像を下賜されることに端を発している。首里王府から下賜された絵像は沖縄戦を経て失われたが、1960年代に同家の主婦が夢の中で土帝君を祀るようにと先祖から催促されたことで、ユタに相談したところ「昨夕からトゥーティーケーが着て貴方たちの迎えを待っている」と言われた。そこで、戦前の土帝君の姿をうろおぼえながらかいてみせたら、その占い師はそれに基づいていまのような姿を描いたという(北谷町史編集委員会 1992)。戦後失われた神体の代替として絵像が選択されたのではなく、首里王府から土帝君の絵像を下賜されたという点に注目したい。首里王府から土帝君の絵像が下賜される事例はどのくらい一般的だったのか。家庭や親族集団単位で祀られる土帝君については市町村史に記述されることが少なく、実態が把握できていないなかで、北谷町上勢頭屋号首里喜友名家の事例は他事例を考える足掛かりともなりえる。なお、筆者の現地調査の結果、神体が確認できなかった例も多かった。うるま市喜屋武、うるま市宮里、うるま市宮城島桃原、那覇市石嶺、那覇市松川、南城市新里、南城市手登根などがそれにあたる。なお、浦添市牧港と西原町翁長の土帝君は神体も現存しないし、信仰そのものも現在みることができない。

また神体の形態を確認できなかった地域は「不明」とした。

信仰には流行り廃りが存在しているため、本研究では可能な限り現地調査を実施した。不明となっている地域については課題としたい。窪が行った調査からは20年以上の月日が経っており、村落祭祀のあり方も変容しているため、信仰の様相についても再調査を行う意義があると考えられる。

3. 考察

以上、沖縄の土帝君信仰について分布、性格、名称、神体の形態の4項目に分けてまとめた。特に性格と名称については特徴的なものを挙げたが、土帝君信仰の多様さを紹介できたと考える。

そのうえで今回整理を行った4項目から土帝君信仰の何が見えるのか、考察を行いたい。土帝君は沖縄島の広い範囲に分布しており、集落ごとに祭祀が行われている。集落ごとの多様性は大きいものの、ある程度の傾向が指摘できる。

沖縄島北部の土帝君は全て神像であり、神像は中国・台湾の土地公像と類似している。また、基本的に土帝君に対する別名を持たない。

沖縄島中部の土帝君に目を向けると、土帝君の神体が石である割合が増加する。沖縄島中部の土帝君が22件に対して、神像を神体とする例はわずか5件しかない。以前は神像であったとする読谷村喜名の例を足しても6件であり、北部地域との差異が目立つ。土帝君の別名としても、ミヤ系、ウタキと称する例等がみられ、土帝君が他の信仰と習合して認識されているような様子が見て取れる。

那覇の土帝君として特徴的であるのは、カラヤーの土帝君である。カラヤーの土帝君は瓦職人によって信仰され、火伏の機能を有している。カラヤーの土帝君の神体は神像となっている。現在の那覇市の規模で考えると土帝君は比較的多く分布しているものの、間切レベルで考えるとその多くは真和志間切であり、次いで小禄間切に分布している。首里や那覇四町の土帝君はカラヤーの信仰が目立つものの、那覇全体でみると一部である。このことから土帝君は、農村にも分布しているのではなく、農村で好まれた神であると考えられる。そしてその特徴は媽祖などの他の中国由来の神と比較するとより際立つ。

那覇地区を除く沖縄島南部の土帝君は、石を神体とする豊見城市・糸満に対し、神像を神体とする南城市佐敷の土帝君とに二分できる。南部地区の土帝君は中部地区と同様に様々な別名を持ち、農耕神や土地の守り神以上の性格を付与されている。こうした性格は土帝君が中国から招来されたのちに、時代の変遷と共に地域住民からの需要に応えるかたちで付与されたのだろうと推測される。

最後に離島の土帝君である。具体的には伊是名

² 窪は北谷町吉原としているが、『北谷町史』に倣って北谷町上勢頭と記載する。

島、伊平屋島、久米島に土帝君が分布している。神体の形態は神像であることが多く、その点においては沖縄島北部と一致する。一方で別名の有無など、島ごとの事情を反映した祭祀の様相も存在している。

なお、動態的な信仰の実態に迫るには、今回取り上げた4項目では不十分な点がある。今回は紙幅の都合により、祭祀に対する記述がほとんど行えなかった。祭日や祭祀組織、招来伝承についての整理は今後の課題としたい。また今回は土帝君の分布として便宜上所在村落を挙げた。しかし実際の村落祭祀と併せて考察すると、土帝君がない村落の自治会役員が土帝君所在村落に赴き、祭祀を行う例がある。より多角的な視野で土帝君祭祀を研究し続けたいと考える。

参考文献

- 浦添市史編集委員会 1983『浦添市史第四巻 資料篇 3 浦添の民俗』浦添市教育委員会
- 大城沙織 2023「土帝君信仰の整理と村落祭祀 南城市・津波古を中心事例として」『公益信託松尾金蔵記念奨学基金編『明日へ翔ぶ一人文社会学の新視点—6』風間書房
- 親志字誌編集委員会編 2012『親志誌』親志郷友会
- 嘉手納町史編纂委員会編 1990『嘉手納町史 資料篇 2 民俗資料』嘉手納町役場
- 宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史第五巻 資料篇四 民俗』宜野湾市
- 球陽研究会編 1974『球陽』角川書店
- 久得史編纂委員会 2019『嘉手納町「久得史」』久得郷友会
- 窪徳忠 1970「沖縄地方の土帝君信仰」窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』東京大学出版会
- 1971『沖縄の習俗と信仰—中国との比較研究』東京大学東洋文化研究所
- 1976「宗教研究の展望」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会』弘文堂
- 1981『中国文化と南島』第一書房
- 1990『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版
- 佐敷町史編集委員会編 1984『佐敷町史 2 民俗』佐敷町役場

塩月亮子 2008「トゥーティーク」渡邊欣雄 岡野宣勝 佐藤壯広 塩月亮子 宮下克也 編『沖縄民俗辞典』吉川弘文館

瀬底誌編集委員会編 1975『瀬底誌』本部町瀬底

田里友哲 1968「沖縄における屋取集落の研究と課題」『集落の歴史地理』歴史地理学会

1983「屋取集落」沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス

北谷町史編集委員会編 1992『北谷町史 第3巻 資料篇 2 民俗上』北谷町役場

1992『北谷町史 第3巻 資料篇 2 民俗下』北谷町役場

豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会編 2008『豊見城市史 第二巻 民俗編』豊見城市役所

今帰仁村史編纂委員会 1975『今帰仁村史』今帰仁村役場

那覇市企画部市史編集室編 1979『那覇市史資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市役所

南城市教育委員会編 2018『南城市の御嶽』南城市教育委員会

平敷令治 1978「ビジュアル信仰」窪徳忠編『沖縄の外来宗教—その受容と変容—』弘文堂

1990『沖縄の祭祀と信仰』第一書房

読谷村史編集委員会編 1995『読谷村史 第4巻資料編 3 読谷の民俗上』読谷村役場

1995『読谷村史 第4巻資料編 3 読谷の民俗下』読谷村役場

立命館大学説話文学研究会・佐敷町教育委員会編 1989『沖縄・佐敷町の昔話』佐敷町役場

中国語文献

王健旺 2003『台湾地理百科 24 台湾的土地公』遠足文化事業有限公司

表 1 土帝君の所在村落

番号	場 所	現地調査・参考文献	番号	場 所	現地調査・参考文献
1	国頭郡国頭村奥間	現地調査	17	中頭郡北谷町桑江	米軍基地内・参考文献④⑤⑥
2	国頭郡今帰仁村越地	現地調査	18	中頭郡北谷町砂辺	現地調査
3	国頭郡本部町瀬底	現地調査	19	中頭郡北谷町玉代勢	参考文献⑤
4	国頭郡本部町浜元	現地調査	20	中頭郡北谷町北谷(山川家)	参考文献④⑥
5	国頭郡宜野座村松田	現地調査	21	中頭郡北谷町上勢頭	参考文献④⑥
6	うるま市与那城屋慶名	現地調査	22	中頭郡北谷町伊礼(注2)	参考文献⑤
7	うるま市喜屋武(注1)	現地調査	23	中頭郡西原町棚原	現地調査
8	うるま市宮里	現地調査	24	中頭郡西原町翁長	現存しない・参考HP①
9	うるま市平良川	参考文献①	25	中頭郡西原町我謝	現地調査
10	うるま市桃原	現地調査	26	宜野湾市大謝名	現地調査
11	中頭郡読谷村喜名	現地調査	27	宜野湾市宜野湾	現地調査
12	中頭郡読谷村親志	現地調査	28	浦添市牧港	現存しない・参考文献⑦
13	中頭郡読谷村長田	参考文献②	29	那覇市久米	参考文献④
14	中頭郡嘉手納町水釜	現地調査	30	那覇市安里	現地調査
15	中頭郡嘉手納町千原	現地調査	31	那覇カラヤー(注3)	現地調査
16	中頭郡嘉手納町久得	参考文献③④	32	那覇市宇栄原	参考文献④⑧
番号	場 所	実施調査・参考文献	番号	場 所	実施調査・参考文献
33	那覇市大嶺(注4)	現地調査	49	豊見城市我那覇(注6)	現地調査
34	那覇市国場	現地調査	50	豊見城市平良	参考文献⑨
35	那覇市首里平良	参考文献④	51	南城市佐敷小谷	現地調査
36	那覇市壺屋	現地調査	52	南城市佐敷佐敷	現地調査
37	那覇市安次嶺	現地調査	53	南城市佐敷新里	現地調査
38	那覇市垣花(注5)	現地調査	54	南城市佐敷津波古	現地調査
39	那覇市真嘉比	参考文献④	55	南城市佐敷手登根	現地調査
40	那覇市牧志	現地調査	56	南城市佐敷屋比久	現地調査
41	那覇市石嶺	現地調査	57	糸満市武富	現地調査
42	那覇市首里山川	現地調査	58	伊是名村諸見	参考文献⑩④
43	那覇市松川	現地調査	59	伊是名村勢理客	参考文献⑩④
44	那覇市寄宮(注3)	現地調査	60	伊平屋村我喜屋	参考文献⑪④
45	那覇市安謝	参考文献⑭	61	伊平屋村田名	参考文献⑪④
46	那覇市泊	現地調査	62	久米島上江洲	参考文献⑫⑬④
47	那覇市若狭	現地調査	63	久米島大原	参考文献④
48	豊見城市与根	現地調査			

注1 現在の所在地は喜仲
 注2 現在の所在地は伊平
 注3 那覇カラヤーの土帝君是那覇市寄宮と同一のものか。現在の所在地は長田。

注4 現在の所在地は宇栄原
 注5 現在の所在地は山下町
 注6 現在の所在地は名嘉地

表1 参考文献

①うるま市具志川市史編纂委員会編 2011『具志川市史 第八巻 民俗編上』うるま市教育委員会発行
 ②読谷村史編集委員会 1995『読谷村史 第4巻資料編3 読谷の民俗上』読谷村役場
 ③久得史編纂委員会 2019『嘉手納町「久得史」久得郷友会
 ④窪徳忠 1990『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版
 ⑤山内健治 2019『基地と聖地の沖縄史 フェンスの内で祈る人びと』吉川弘文館
 ⑥北谷町史編集委員会 1992『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』北谷町役場
 ⑦浦添市史編集委員会 1983『浦添市史 第4巻資料編3 浦添の民俗』浦添市史編集委員会
 ⑧波平エリ子監修 2012『小祿の拝所』那覇市小祿南公民館
 ⑨豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会2008『豊

見城市史 第二巻 民俗編』豊見城市
 ⑩伊是名村史編集委員会 1989『伊是名村史下巻(島の民俗と生活)』伊是名村
 ⑪諸見清吉編 1981『伊平屋村史』伊平屋村史発刊委員会
 ⑫久米島西銘誌編集委員会 2003『久米島 西銘誌』久米島西銘誌編集委員会
 ⑬沖縄久米島調査委員会編 1983『沖縄久米島資料篇「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』弘文堂
 ⑭那覇市企画部市史編集室編 1979『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室

参考HP

①西原町ホームページ
<http://www.town.nishihara.okinawa.jp/sset/29tanaharahigakenodoteikun.html>
 (最終閲覧日2021年12月6日)

表 2 土帝君の別名

	地域名	参考文献
ミヤ(宮)系	嘉手納町水釜	①
	嘉手納町千原	①
	那覇市壺屋	聞き取り調査
	南城市津波古	聞き取り調査
	うるま市宮里	②
	南城市新里	聞き取り調査
フトウキ(仏)系	糸満市武富	③
	伊是名村諸見	④
	伊是名村勢理客	④
	那覇市大嶺	⑤
ティラ	那覇市国場	⑤
ウタキ小	嘉手納町久得	①
クラヌカミ	北谷町桑江	⑥
イモウフスー	南城市字佐敷	聞き取り調査

表 3 土帝君の神体の形態

	場所	形態	参考文献
1	国頭村奥間	神像	現地調査
2	今帰仁村越地	神像	現地調査
3	本部町瀬底	神像	現地調査
4	本部町浜元	神像	現地調査
5	宜野座村松田	神像	現地調査
6	うるま市屋慶名	神像	現地調査
7	うるま市喜屋武(注1)	無	現地調査
8	うるま市宮里	無	現地調査
9	うるま市桃原	無	現地調査
10	うるま市平良川	無	①
11	読谷村喜名	石	現地調査
12	読谷村親志	石	現地調査
13	読谷村長田	無	②
14	嘉手納町水釜	石	現地調査
15	嘉手納町千原	石	現地調査
16	嘉手納町久得	不明	②
17	北谷町桑江	石	③
18	北谷町砂辺	石	現地調査
19	北谷町玉代勢	不明	③
20	北谷町北谷	石	③
21	北谷町上勢頭	絵	③
22	北谷町伊礼(注2)	無	現地調査
23	西原町棚原	神像	現地調査
24	西原町翁長	現存せず	④
25	西原町我謝	石	現地調査
26	宜野湾市宜野湾	神像	現地調査
27	宜野湾市大謝名	石	現地調査
28	浦添市牧港	現存せず	⑤
29	那覇市久米	不明	⑥
30	那覇市安里	石	現地調査
31	那覇カラヤー	神像	⑥
32	那覇市宇栄原	無	⑥

注1 現在の所在地は喜仲
注2 現在の所在地は伊平
注3 現在の所在地は宇栄原

注4 現在の所在地は山下町
注5 那覇カラヤーの土帝君は那覇市寄宮と同一のものか。現在の所在地は長田。
注6 現在の所在地は名嘉地

表 3 参考文献

- ①うるま市具志川市史編纂委員会編 2011『具志川市史 第八巻 民俗編上』うるま市教育委員会
②読谷村史編纂委員会編 1995『読谷村史 第4巻 資

表 2 参考文献

- ①嘉手納町史編纂委員会編 1990『嘉手納町史 資料篇 2 民俗資料』嘉手納町役場
②うるま市具志川市史編纂委員会編 2011『具志川市史 第八巻 民俗編上』うるま市教育委員会発行
③糸満市史編集委員会編 2010『糸満市史資料篇13 村落資料 一旧兼城村編一』糸満市役所
④伊是名村史編集委員会 1989『伊是名村史下巻(島の民俗と生活)』伊是名村
⑤那覇市企画部市史編集室編 1979『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室
⑥北谷町史編集委員会 1992『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』北谷町役場

	場所	形態	参考文献
33	那覇市大嶺(注3)	石	現地調査
34	那覇市国場	神像	現地調査
35	那覇市首里平良	不明	⑥
36	那覇市壺屋	不明	現地調査
37	那覇市安次嶺	石	現地調査
38	那覇市垣花(注4)	石	現地調査
39	那覇市真嘉比	不明	④
40	那覇市牧志	石	現地調査
41	那覇市石嶺	無	現地調査
42	那覇市首里山川	神像	現地調査
43	那覇市松川	無	現地調査
44	那覇市寄宮(注5)	神像	現地調査
45	那覇市安謝	不明	⑥
46	那覇市泊	石	現地調査
47	那覇市若狭	石	現地調査
48	豊見城市与根	石	現地調査
49	豊見城市我那覇(注6)	石	現地調査
50	豊見城市平良	不明	⑦
51	南城市佐敷津波古	神像	現地調査
52	南城市佐敷小谷	神像	現地調査
53	南城市佐敷新里	石	現地調査
54	南城市佐敷佐敷	石	現地調査
55	南城市佐敷手登根	無	現地調査
56	南城市佐敷屋比久	神像	現地調査
57	糸満市武富	石	現地調査
58	伊是名村諸見	神像	現地調査
59	伊是名村勢理客	神像	現地調査
60	伊平屋村我喜屋	不明	⑨
61	伊平屋村田名	不明	⑨
62	久米島上江洲	不明	⑩
63	久米島大原	不明	⑪

料編 3 読谷の民俗 上』読谷村役場

- ③北谷町史編集委員会 1992『北谷町史 第3巻 資料編2 民俗下』北谷町役場
④西原町ホームページ

<http://www.town.nishihara.okinawa.jp/asset/29tanaharahigakenodoteikun.html>

(最終閲覧日：2024年2月22日)

- ⑤浦添市史編集委員会 1983『浦添市史 第4巻 資料編3 浦添の民俗』浦添市史編集委員会
- ⑥那覇市企画部市史編集室編 1979『那覇市史資料篇 第2巻 中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室
- ⑦豊見城市史編集委員会民俗編専門部会 2008『豊見城市史 第2巻 民俗編』豊見城市役所
- ⑨諸見清吉 1981『伊平屋村史』伊平屋村史発刊委員会
- ⑩沖縄久米島調査委員会編 1983『沖縄久米島資料篇「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』弘文堂
- ⑪窪徳忠 1990『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版

